

## 昆虫に学ぶ未来社会の防災対策

### ～高齢者の地域ケアネットワークシステムのモデルに関する一考察～

災害対策と ICT 領域 京 野 義 明

#### 概 要

2011 年に発生した東日本大震災は、新たな防災対策の転換が求められ、地域住民による防災力や地域のコミュニケーション力や「絆」が重要視されるようになった。

そこで、本研究では、災害を自然現象でなく、社会現象の問題としてとらえた。総合的な防災力を向上させ、一人でも多くの命を助けるためには、地域の特性と住民がどうかかわるかが重要であると考えた。それらの考察は、非常に複雑なため、「心理学者 Lewin の人間の行動式」や「他人とのコミュニケーションを円滑にするジョハリの窓」と「昆虫の知恵」を参考にして高齢者の地域ケアシステムのモデルを構築した。

日本列島は、平地が少ないため、被害の対象になる「素因」（地形や建物）がたくさん存在する。被害を軽減するためには、自然現象のメカニズムを正しく理解することである。しかし、それだけでは十分とは言えない。むしろ、私たちのできる重要なことは、災害を想像して備えることである。また、災害発生後も最善の復興に向かって、対応行動をとり続け、未来社会の構築へ進化していくことである。大地震は、百年、千年の単位で起こる。それで、地域の減災対策は、災害を想定した現実対策も必要であるが、環境の変化を想定した未来対策、すなわち、生活の中に取り入れ、日常化することである。そのため高齢者会（となり組）の趣味の会を例にとって考察した。

社会は、人と人のコミュニケーションによって、つながっている。昆虫などは、光、ニオイ、音などでコミュニケーションをしている。単純で明快で非常にわかりやすい。それに比べ、人は、言語を持ち感性を持っているため、人間関係・存在や共有・共生は非常に複雑である。言葉は、送信側は送れば終わりであるが、受信側は終わらず、良くも、悪くも受け取られてしまう。言葉は、二面性があり、ここにコミュニケーションの難しさがある。

本研究で、上記のことを考えてわかったことは、社会の持つ防災力を高める一つの方法として、コミュニケーションの活性化がある。その土俵は、共有化である。その条件に適合しているのが、各地域の高齢者会、婦人会である。同じ傘下に集まる「となり組」である。その特徴は、時間的余裕、人生のプロ、人材の宝庫である。更に、人材の組合せで個々のニーズに合った少量多種類の対策が可能である。また、助ける、助けられる、の相互扶助も可能である。

本稿は、未来社会の防災対策を考察してきたが、地域の防災力を高めるには、高齢者会（となり組）の特性を生かし、コミュニケーション能力を高め、日常化することが重要であることが分かった。情報化社会の進歩に対応して、高齢者の地域ケアネットワークシステムをどのように構築して、人材をコーディネートしていくかが、今後の課題である。